

はぐれ焼夷弾

河津一哉 (87歳・東京都杉並区)

ふるさと熊本市をアメリカの爆撃機が襲ったのは、戦争も終わりに迫った一九四五(昭和二十)年七月一日から二日にかけての深夜のこと、およそ一時間続いた。そのとき私は十五歳。家を離れ、市の北方、清水台と呼ばれる台地の上の陸軍の学校（註）にいた。

燃えさかる市街の黒い輪郭。あの炎と煙には焼け落ちる音や人々の叫び声が満ちていただろうに、なにも聞こえてこなかった。鮮明なテレビ画面から音声だけが消えたような光景だった。

音は空からきた。「ドロー……」。

生きた心地はしなかったろう。空襲の記憶などまったくないという末の妹にしても、あたりが急に明るくなったり、不穏な騒音に囲まれたりすると、いまでも胸騒ぎが起こるといふ。これもあの夜の体験と無縁ではなからう。

この焼夷弾は断面が正六角形、長さ五十センチの筒形で、それを十六本ずつ三段、計四十八本の束にまとめ投下する。途中、帯が解けてばらまかれる。この束を爆撃機一機で八十個ずつ搭載した由。同年三月十日の東京下町大空襲でひどい火付けを働いた代物だ。わが家に偶然落ちてきたのは束の中のほんの一本だったが、一家のその後の暮らしを大きく変えた。

家を焼かれて一行は父の故郷である阿蘇山北の山里を目指した。間断ない艦載機の空襲下、幼児連れで列車の乗り継ぎ、山道の右往左往。この逃避行の仔細を母はあまり語ろうとしなかった。なれな

しの消火に疲れ果てたのか。

母校の出水国民学校をめぐる塀が正門の手前で大きく曲がる。そこで立ち止まってしまった。

見えてくるはずのわが家の屋根が見えない。走った。熊本市出水町大字国府八二番地は、黒焦げの瓦礫に、瓦をのせたままの屋根が覆いかぶさっていた。瓦はまだ熱く、あたりには石油くさい匂いがたちこめていた。

人の気配がない。母三十八歳、第十歳、五歳、四歳、二歳の三人の妹たちは無事か。近所の人も姿を見せない。もしや。七たび生まれ変わってこの恨み、必ず晴らしてくれようと大まじめで誓った(父四十三歳は軍医予備員の召集を受け、米軍の上陸が予想される宮崎県は日向灘海岸の油津（註）という港町の病院に待機していた)。

近くに焼け跡らしいものも見当たらない。焼けたのはわが家だけのようにだ。すこし離れた隣組のお

こうして軍を離れた。「苦労かけたね」帰りが最後になった父を囲んで家族がそろった夜、父は紋切型を言い、母に頭を下げた。言葉はなく、涙だけが見るまにあふれた。わが家で最も長く「戦

ばさんが教えてくれた。「みなさん、

ご無事です。ご親戚の家に向かうとか、子どもたちをつれて」ほつとひと息、帰校した。

以下は、戦後再会した弟から聞いた話だ。あの夜、さあ空襲だと、みんな起こし起こされて庭先の防空壕に入り、フタをしめた。その瞬間、風にもあおられたか、大きくそれた一本のはぐれ焼夷弾が、そのフタに落ちたのだ。

突然の閃光と炸裂音に肝を冷やしたみんなが、反対の口からこわごわぞろぞろ這い出た。見たら、火のついたゼリー状の油脂があたり一面に飛び散っていた。雨戸を開けたままの縁側の障子は、すでに棧まで燃え出していった。

一家が炎に包まれたとき、二番目の妹が、「キレイ」と言いながら、どンドン近づいていくのを必死で止めた。一番目の妹はおぼえていた。母は小さい末の子を抱える。ほかの子たちもまだ目が離せない。

争」と戦ったひとだった。河津一哉(かわづ・かずや)さん。当時15歳、熊本市在住。元暮しの手帖編集部員で、前作『戦争中の暮しの記録』の編集スタッフのひとり。

高見さんの紙芝居

絵・投稿者・高見省一
(85歳・岡山県津山市)



私は八年前から手作りの紙芝居『日本の戦争』を作りはじめました。その動機は、テレビの街頭インタビューで三人連れの娘さんが「え、日本がアメリカと戦争したって? うそっ!」や、男性大学生が「アメリカと戦争? どちらが勝ったの?」と言いつつ放った発言にあります。

『ヒットラーのユダヤ人大虐殺』『戦いで傷つく子供たち』を作成して、小学校・図書館などで戦争を語り継いでいます。